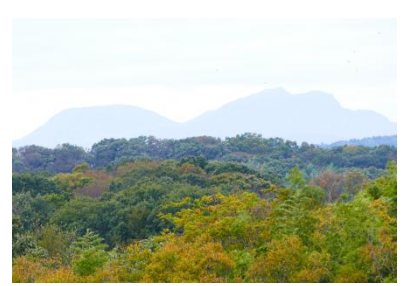


＜深まる秋色＞空気はそれほど澄みきってはいないのですが、霞む箱根外輪山(金時山と明神ヶ岳でしょうか)を背景にした雑木林の色づきは秋の深まりを感じさせます。キャンパスではイチョウに次いでイヌシデの黄葉そしてアカシデの紅葉がひととき目立ちます。もう少し経つとハリギリの黄葉とイロハモミジの紅葉が際立つようになるでしょう。ところで葉の色づき方は同じ樹種でも場所により随分異なります。昼夜の温度差の大きい方が色づき易いらしいですね。「このもよりのかのも色こき紅葉(もみじ)哉(蕪村)」。



＜イヌシデの黄葉＞

＜アカシデの紅葉＞

＜色とりどりの宝玉＞道路脇や雑木林の縁辺ではノブドウの実が見られます。

艶やかな空色をした径 5mm ほどの宝玉のような実で、白くて大きいのはタマバエの仲間が卵を生み付けた虫こぶです。雑木林に少し入ると下生えの中にヤブコウジの赤い宝玉が目につくようになりました。地表から数センチのところ実に実が対になってぶら下がっていて、あと一月ほどでもっと真っ赤になるでしょう。もう一つ紹介したいのがクサギの実です。花と若い実(No.46 参照)にも増して色鮮やかな雑木林の宝玉(宝珠)です。一方、キャンパスのあちこちに植えられているクスノキには黒光りのする実が沢山稔っています。シロダモの赤い実(No.23 参照)も輝いています。



＜ノブドウ＞

＜ヤブコウジ＞

＜孤独＞この秋はドングリやユズを始めヤブコウジでさえ豊作ですがどうやらカキは別のようなようです。昨秋は沢山の実を付けていた木にはたったの一個。柿(カキ)



＜クサギ＞

＜クスノキ＞



＜早や木守柿？＞

は収穫してから一つ二つを“木守柿(きもりがき)”として残す慣わしがありますが、端からは寂しい限りです。「弱音など吐かぬつもの木守柿(保坂加津夫)」です。

(木守柿)次の年も豊作になるようにとの願いからとか、鳥たちへのおすそ分けとかの意があるようです。秋ではなく冬の季語。

(文と写真：松本正勝)